同窓会会報

第16号

昭和46年12月20日
発行所
茨城県東茨城郡
内原町鯉渕5965
鯉渕学園同窓会
印刷所
㈱ 双葉軽印刷所

新しい時代を迎えた学園

同窓会長再任にあたって

和田文雄

晩秋のよく晴れた鯉渕の一角には幾分熟期をすぎた陸稲がよく稔った穂を垂く垂れていました。

これは、本年より実行に入った学園の経営向上のため執られた農場の拡充計画の第一段階として雑木林を開墾して作付されたものです。陸稲の稔りは天候不順ではあったけれど開墾初年度のこともあって、計画の将来を祝福するような出来栄えです。

同窓会第十回大会は十一月三日全国から多数の同窓生のご参集を得て開催され再び会長に選ばれましたので全国の同窓生の皆さんにご挨拶申し上げます。

全国四千名に達する同窓生はここ数年来、母校の将来について心配し続けて参って来たところでありますが、学園そのものは経営方針やその運営の上でどん底にたちいたったとき、むしろ安心立命、安心決定（あんじんけつじょう）の心機を得たかの如く静寂を保っているの感をうけるのであります。

それは、遠心分離機にかけられ、用不用を定め不用の夾雑物が除去されてきたからなのであります。

農業において、農作業を行なわないで農業生産をあげ得られようはずはありません。農場実習・農場経営を担当して者に対して、これを軽視するところに、農業生産の向上は基本的に失われるのであります。雑草の繁茂する夏のころ常磐線を内原駅でおりて日本国民高等学校の農場を見学し、草一つない農場を見て、学園を訪れるとそれは雑草の中に何ものかを埋め去ったかの感じをもちます。そしてさらに遠くの機械化研修のための農場を見ると機械と雑草とはいかなる関係をもつのだろうか。大型の農機具というものが、わが国の農業の近代化のために欠ことのできないものであるにしても、雑草をどうしようとするのだろうかと感ずるのであります。

国民高等学校の方式を鍬鎌精神の古くさいものだとし、学園の方式を近代理論・農業だといっていた人もありますが、古来、上農は草を見ずして草をとり、下農は草を見て草をとらずというとおり、理論も機械もそこに精神・心が欠けていたのでは作物は育たないのでありましょう。鍬と鎌とで農業をしようとするのでなく、鍬と鎌を使いこなすことのできない精神・心ではいかに機械が発達しても理論が高度化されてもそれは猫に小判というところでありましょう。

いま、母校、鯉渕学園の経営に必要なことはこの地に学園の前身が設置されたときからの建学の歴史と建学の精神を正しく評価し、正しく受け継ぐことであります。必要なものを必要とし、なお不必要なものをも必要とすることであります。農業における教育が環境に恵れ、充実した指導の精神に恵れるときこそ理想の体制をつくりあげることができるでありましょう。

それはつねに、いまをおいてはないのであります。明日にそれを求めてまたできるものではないでありましょう。

私たち卒業生が、鯉渕の地を、学園を思いおこしながら、そこに何を求めるでありましょう。精神的なよりどころとして懐しもがなつかしさを持つのです。その学園を同窓生の手によって立派なものとして申し送らなくてならないのであります。

昨年秋以来、五ケ年間にわたって実験室・研究室・教室・寮・本館・講堂など基本的な施設は約二億五千万円の国費をもって建設される見通しとなりました。誠心、行えば出来るのであります。まさに学園は新しい時代を迎えたのであります。そして今後、同窓会として考えることは同窓生の力によって相当多額の資金を積立てる方法によって、学園運営の費用を確保してゆくことでありましょう。私たちはこのことを考え実行に移してゆきたいものであります。

同窓会大会を機会に重ねて同窓生の皆さんに学園の発展へのご協力を訴えるとともに、報われること少く今まで働いて下さった学園の教職員の皆さんにお礼を申し上げ、これからも学園の発展のためご尽力とご協力をお願い申し上げる次第であります。

事務局から

東京二期　高木敏二氏より寄附

第十回同窓会大会の際、高木さんから金一万円の寄附をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

ある農場に想う

秋浜　浩　三

先日石橋先生との話題の中で「農家があっても農場のない」ことが、日本農業のむつかしさだと、氏は嘆息されていた。

人口の多い割合に、国土が甚だしく狭いわが国では、その農業構造もまた零細ならざるをえず、際限なく広い万能地を擁して発展した新大陸や、オセアニアの農業には、遠く及ばないにしても、せめてヨーロッパ並の規模をと、希うのはひとりわれわれのみではないであろう。そこで北海道を想い起こして見よう。

北海道には、その数は多くないが、ヨーロッパに近いと思われる経営が、道内に散見されるようである。その中でとくに集団として見られるのが、札幌の近くにある。

先年私はそこを訪れたことがあった。羽田を飛び立って一時間あまり、千才飛行場の上空を旋回するとき、人家のほとんど見られない広々とした灌木原野の中に、どこか北欧を想わせる農場群の景観が眼に入ってくる。大規模な工場団地の予定地にも見まごうほど、整然とした大区画がならび、その中に大型の畜舎とサイロが点在して、内地からの始めての客には、空から先づ北海道の異国的情緒を味あわせてくれる。勇払郡早来町遠浅部落がそれである。

樽前山の噴火によって数メートルの深さに堆積した火山灰地で、有機物に乏しく、きわめて瘠薄な土地・しかも鹿児島・宮崎両県下に見られる、いわゆるシラス台地よりもさらに粗い粒子の土壌＝粗粒火山灰＝のこの地帯は、いわば不毛の地として、北海道農業からもとり残されていた観があった。昭和五年この部落民たちによって最初の鍬が入れられてから四〇年間に、営々辛苦をかさねて今日の代表的な酪農団地がきづきあげられたのである。

人里はなれた「荒涼たる原野の寂寥」、樽前おろしの「凜烈肌をつんざくような寒風とすさまじい吹雪」とたたかいつつ、将来の大規模経営に夢をつなぎ、互に励まし合いながら奮闘されたこの人々の気概を思うとき、「躍動する開拓魂」に胸を打たれたのである。ともあれ今日では、六〇頭前後のすぐれた搾乳牛を相手に、近代的経営に余念のない酪農家をみるとき、日本の農業にも、明るい希望がわきおこるのであった。

私はここで小倉武一氏の文章をお借りしてみたい。『部落といっても府県の部落とは趣をことにする。西ヨーロッパ先進国の酪農村といったほうがよいであろう。昨年北ヨーロッパ三国、イギリスなどの農家を訪れて、日本でこのような農村が生れるのは可能だろうか、と疑ったことがあったが、そのような農家の農場や農舎や住家のたたずまいに近いものを眼前に見て、北海道農業の可能性は疑いないものになったのであった。このような農家の一群が遠浅部落に生れるについては、その農家の人々のたいへんな苦闘があったようだが、その苦闘を物語る誓いの文章を見せてもらったほか、その苦闘の痕跡とみられる廃屋同様の農舎をみせてもらったりした。しかし今はどの農家も、農家というよりは農場という観念がぴったりするものだった』（「新しい農業の理念」より）

私はこの部落について、かくも長々と記したのは、ほかではない当部落でいわばリーダー格をつとめて、部落を成功に導いた農家の一人に、わが鯉渕学園の卒業生がいるからである。それは山田（旧黒河内）明人氏その人である。氏は学園の第五期生として卒業後札幌郊外の町村牧場に練習生として入り、日本酪農界の先覚者として知られる故町村敬貴先生の厳しい訓練を受けたのであったが、その人柄と不屈の精神は、師の深く信頼するところとなったといわれる。

この不毛の地に裸一貫の鍬を揮い、よく今日の成果を収めたゆえんは、科学に裏付けられた自信と、部落民を相互に堅く結ぶヒューマニズム、そしていかなる困難にもくじけぬ不屈の精神であったと思うのである。鯉渕学園の伝統とする精神が、山田さんによって大きく発揚されたことを信じ、感謝を捧げたいのである。

石橋先生の期待する農場は、かくして北海道には既に生れ、これからもその望みはあるであろう。しかし狭い耕地に農家が密集（？）する府県の農村は如何であろうか。そこでは特殊な工夫と抜本的な国家的対策がなされねばなるまい。それと同時に農家には時代に即応するための心の大転換が必要となろう。

政府も赤城農相のもとで、農業団地の造成や、農地の「所有と経営」を分離するなどにより経営規模を拡大し、国際競争力を大巾に育てるため、基本法の改正を含めて、農業の抜本的な再編成を検討しているとのことである。

地価の高騰、労働力の激減傾向、労働の老齢化、女性化など、農業をとりまく環境は大きく変貌している反面、農家戸数はあまり減らないという現実の中にあって、農民に対しては、「よりよき生活」を保証しながらこれらの政策を実行することは、甚だしい困難があろうが、勇気と愛情を以って進めてもらいたいものである。

農家もまた日本農業の過去や現実にのみこだわらず、新しく明るい農業をきづくためならば、よき工夫と努力と協力を惜しまぬよう希望するものである。

日本経済の発展が世界の瞠目するところであったと同様に、世界最大の難題をかかえるとされる農業もまた、国民の英知によってやがては、世界のリーダーシップをとる時代の来ることを期待したい。そしてその可能性はあると私は思うのである。

第十回 同窓会大会開催さる

十一月三日午前、新三番教室において第十回大会を開催、出席者数八十余名、和田会長の挨拶、議長に小林道男氏（長野四期）、副議長に前原敬氏（東京十六期）を選出、書記に三浦喜美男氏（茨城二十五期）、議事録署名人に山口次夫氏（神奈川一期）、倉重一夫氏（茨城十一期）を任命して議事にはいりました。

昭和四十五～六年度の経過報告、事業報告、決算報告を西村事務局長、監査報告を張替監事がおこない、報告どうり承認されました。また昭和四十七～八年度事業計画および予算案も原案どうり可決されました。その大綱は次の通りです。

一、昭和四十五～六年度経過報告

学園は三年制スタートの時期であり、それに伴なう教育内容の検討、教職員の充実、諸施設の整備と多難の年でありました。

学園の経営改善計画の立案とそれの推進は至上命令で、学園当局の努力は勿論同窓会としても、学園と一体となって難局の打開にあたり、将来計画も出来あがって、昭和四十六年度事業として、実験室と女子寮の建築がすすめられています。

名簿も皆さんの協力によって発行することが出来、また鯉渕学報の発刊も発刊出来ました。

会費の納入者数一千百名と好転して来たが納入率は低く今後も皆さんのお力添えをお願いして経過報告とします。

二、昭和四十五～六年度事業報告

(1) 会報の発行

第一二号　昭和四四年一二月発行

第一三号　昭和四五年九月発行

第一四号　昭和四五年一二月発行

第一五号　昭和四六年七月発行

(2) 会員名簿の発行

本件については、随時住所の改訂を行なっておりましたが、新会員の増加、数多い住所変更、転居先不明も累積して、昭和四十六年の二月と八月には集中的に新名簿発行のための準備を実施しました。また、会報十五号と一緒に住所不明者の一覧表を同封し、会員の皆様に協力を依頼しました。その結果、多数の方から不明者の住所、勤務先等をお知らせいただき、それを盛りこんで九月に印刷に付しました。予算の面から体裁等前回名簿を踏襲できぬ点もありましたが、準会員（在学生）を含む四千名を記載した四十六年九月版の会員名簿が出来あがりました。

(3) 第二回　支部長会議

昭和四十五年七月四・五日の両日に開催、岩手県支部から愛媛県支部までの十九支部、二十一名の支部長や支部役員、本部から会長外常任委員、学園から副学園長外、学生代表も参加して、総勢四十名。各支部の情況報告、支部活動の強化策、鯉渕学園の将来計画、鯉渕学報の発刊等について、熱心な討議が行なわれました。その概況は会報十二号でお知らせした通りです。

(4) 常任委員会

第一回　昭和四四年一一月二日

事務局長の選出

第二回　昭和四四年一・月二九日

昭和四五・六年度事業の推進方策

第三回　昭和四五年三月二八・九日

鯉渕学報、支部長会議の件

第四回　昭和四五年五月三〇日

昭和四五年前期決算、鯉渕学報、支部長会議の件

第五回　昭和四五年一二月五日

昭和四五年度決算、四六年度事業について

第六回　昭和四六年五月八・九日

昭和四六年度前期決算、鯉渕学報会員名簿、第二〇回大会について。

第七回　昭和四六年一〇月一六日

昭和四五・六年度決算、昭和四七・八年度計画について

(5) 支部会への役員派遣

二四期生会　事務局長出席

昭和四五年三月二一日　東京

栃木県支部役員会　事務局長出席

昭和四五年五月一〇日　宇都宮市

茨城県支部総会　事務局長外出席

昭和四五年五月三一日　水戸市

岩手県支部総会　事務局長出席

昭和四五年九月五日　盛岡市

愛媛県支部総会　会長出席

昭和四六年八月二二日　松山市

外に福井、東京（市場支部）で埼玉、長野、福島、栃木、山形、山口の各県支部等より御連絡をいただきながら出席できませんでした。

(6) 農林省・協会・学園当局との懇談会

本件については、昭和四十五・六年度の事業計画の中で最っとも意を用いたところで、積極的に関係者との懇談をすすめ、特に鯉渕学園の将来計画を立案するにあたり、同窓会の果した役割は大きく、かつ重要であったと確信しております。

とくに農林省との懇談に当っては、省内の同窓生に格別のお骨折りをいただきました。

(7) 鯉渕学報の発行

年度当初の計画になかったものだけに、出版にこぎつけるまでには幾多の困難がありました。昭和四五年二月編集委員会を発足させて以来、会議を重ね、執筆を依頼し、一年有余の才月を経て先般やっと発刊出来ました。尚、内容は次の通りです。

鯉渕学報　創刊号　B五版　六七頁

執筆者一覧

発刊にあたって　和田文雄（会長　農林省　二期）

発刊にあたって　秋浜浩二（学園長）

発刊に寄せて　石橋幸雄

日本農業四つの論点　（副学園長）
満永正昭
（農林省　四期）

青果物集配センターの意義と実態
川野博正　（全販連　五期）

総合実験農場の考察　中村恵一
（農林省　四期）

農林省「農業経営調査の足跡と経営構造改善調査」の開始　佐藤三郎
（農林省　二期）

後継者の経営参加と経営発展
久保良雄　（中国農試　二期）

新しいみかん栽培技術　早上満夫
（熊本県専技四期）

田植機利用の稲作技術　渡辺正信
（茨農試　七期）

グレープ・フルーツ余録　岡　千里
（学園教授）

松本ぶどう園をたずねて　張替誠二郎
（茨城・普及員　五期）

酪農場の発展過程　砂田義雄
（学園教授　五期）

今月の統計　今田忠雄
（農林省　五期）

三、昭和四十五～六年度会計決算報告書

1、一般会計

(1) 財産目録

(2) 収支明細表　収入の部

支出の部

2、基本会計

昭和45・46年度会計決算報告書

1　一般会計

(1) 財産目録

摘要	金額	内訳
資産の部		
現金	0	
貸付金	6,240	20周年会計
資産合計	6,240	

摘要	金額	内訳
負債の部		
借入金	290,000	44年度
〃	246,000	基本会計
〃	25,916	学園経理
負債合計	561,916	
純財産	△555,676	

(2) 収支明細表
収入の部

科目	予算額	45年度	46年度	決算額	増○ 減△
前年度繰越金	267,065	267,065		267,065	
会費	2,000,000	589,000	581,140	1,170,140	△829,860
預金利息	130,000	43,578	38,098	81,676	△48,324
名簿代	190,000	33,000	35,100	68,100	△121,900
借入金			271,916	271,916	○271,916
寄付金		3,500	500	4,000	○ 4,000
その他の収入					
24期生会より返済金		20,000		20,000	○ 20,000
9回大会の経費残		27,903		27,903	○ 27,903
20周年事業より返済金		6,000		6,000	○ 6,000
雑収入	1,000		1,000	1,000	
鯉渕学報代金			900	900	○ 900
合計	2,588,065	990,046	928,654	1,918,700	△669,365

支出の部

科目	予算額	45年度	46年度	決算額	増○ 減△
会報発行費	478,000	124,890	134,090	258,980	△219,020
名簿発行費	421,000		342,800	342,800	△ 78,200
鯉渕学報発行費			165,000	165,000	○165,000
支部長会議費	520,000	241,680		241,680	△278,320
通信費	102,000	24,100	22,430	46,530	△ 55,470
人件費	300,000	129,900	138,700	268,600	△ 31,400
事務費	50,000	61,786	43,690	105,476	○ 55,476
旅費	246,000	104,800	42,900	147,700	△ 98,300
会議費	30,000	60,369	29,305	89,674	○ 59,674
返済金	304,000	14,000	—	14,000	△290,000
予備費	119,065	76,300	99,460	175,760	○ 56,695
終身会費積立金		62,500		62,500	○ 62,500
合計	2,588,065	899,525	1,019,175	1,918,700	△669,365

昭和45・46年度　総収入　1,918,700円
〃　総支出　1,918,700円
差引残高　0円

2　基本金会計

(1) 財産目録

摘要		金額	内訳
資産の部	現金	0	
	預金	600,000	三菱信託銀行
	預金	500,000	中央信託銀行
	貸付金	290,000	44年度
	貸付金	246,000	46年度
合計		1,636,000	
負債の部		0	
純財産		1,636,000	

昭和45・46年度　総収入　746,000円
総支出　746,000円
差引残金　0円

四、昭和四十七～八年度事業計画ならびに予算

1、事業計画

(1) 同窓会報の発行　四回

(2) 鯉渕学報の発行　一回
（学園の事業を助成する計画）

(3) 支部長会議
四十七年度中に実施

(4) 支部活動の促進

(5) 学園教育に対する協力援助

2、昭和四十七～八年度予算
収入の部
支出の部

昭和47・48年度予算

収入の部

科目	金額
前年度繰越金	0
会費	2,000,000
預金利子	143,000
名簿代	200,000
鯉渕学報代	480,000
その他収入	10,000
合計	2,833,000

支出の部

科目	金額
会報発行費	480,000
鯉渕学報発行費	240,000
支部長会議費	420,000
通信費	169,000
人件費	312,000
事務費	200,000
旅費	250,000
会議費	100,000
返済費	300,000
予備費	362,000
合計	2,833,000

五、昭和四十七～八年度役員

昭和四十七・八年度の役員については全会一致、前年度役員が全員留任されました。

秋浜学園長を全員一致で同窓会顧問に推載することに決定しました。都合でおくれて出席された学園長に、パーティ開催の直前、会長より、顧問にお願いし、心よく引受けてくださいました。

大会終了後、新一番教室にて懇親会を開きました。先ず最初に学園長の挨拶があり、「安心して教育できる状態に」を強張されました。

なごやかな雰囲気の中で無事大会の全日程を終了し、再会を誓って散会いたしました。

尚大会終了後、第一回常任委員会が開かれ、新事務局長に高橋隆三氏（酪農場九期）が選出されました。

同期の集い

十五年ぶりのクラス会（十一期生）

月日の流れは早いもので、先生方から華向けの御言葉を載き、学窓を巣立って幾星想、十五年がすぎました。

この間、全国の同級生から、今年は、是非クラス会を開催するようにと、強い励ましに支えられて、地元に住む私達は重い腰を上げた恰好でした。

果してどれだけ参集願えるか、農業関係では、秋の収穫期が、冷害、不作対策で奔走している仲間が多いこと、農業以外ではニクソンショックが産業界をつつみつつあることや幹事としての心配は脳理を離れなかったが、十一月二日のクラス会の会場前は、その心配はどこ吹く風真に華やかなものであった。

世話人の茨城組の真下寿宣君（経済連勤務）吉川昭雄君（茨大助手）大武克也君（郵便局勤務）佐藤昭八（藤代町農協経済課長）志賀隆男（北茨城農協勤務）二次（金沢）えい子さん（生活改善普及員）が勢揃い……まだ会場が整理されない内に石川県から、大沢要君（農業委員・農協理事など奉職しながら生糸の生産工場を経営する社長）と駒崎（松本）実君（農業共済連合会の中堅職員として活躍）がトップを切った。握手攻めである。

続いて岩手県から菅原昭一君（農協理事・岩手県農協青年連盟役員を奉職しながら水稲十リンゴ園を経営する白立農家学生時代と変らぬファイトマンである）続いて富山組、ダブルの脊広がすっかり地についた小坂正作君（土木建設小坂組社長代理従業員九〇名の会社を経営）と中村又二君（農業改良普及員として活躍学生時代は又ちゃんの愛称で呼ばれた人気者、今回は、奥様同伴で出席）竹内敬俊君（大谷技術短期大学に勤務、学生指導主事として活躍）続いて遠路、北海道から沖田清次君（妹脊牛町農協企画管理課長として大農協を背負っている）続くは肩がちぎれんばかりに大きな荷物を持って現れた長野の上沢好英君（リンゴの集約栽培の研究と品種改良に努力しているリンゴ園の経営者）

開会の時間が迫る。オスの挨拶と共に懐かしい顔が揃う。千葉から長谷川周弘君（丸千工業KK取締役として活躍）東京から宮地勉君（グリコ乳業KK勤務）長野から奥様同伴で桐生純治君（地元役場で農業振興のかたわら青年部組織育成に努力）静岡から村田和彦君（県農業会議総務係長として活躍）

受付けを担当する幹事は、業務を忘れて握手攻め最高の雰囲気である。愛知から小野田正君（新しい農業に積極的に取り組んでいる）京都から岸本久一郎君（舞鶴市役所勤務）地元・茨城から井坂満君（日産自動車販売KK潮来販売所長）小林（宇留野）年寿君（桂村農協勤務）野原小右二君（マメトラ農機茨城販売所長）山田重雄君（水戸市役所勤務）女子組では、遠路徳島から華岡淑子さん（生活改善普及員、仕事一筋で現在独身・独身生活も今年で最後とか）奈良県から吉谷（森田）富美子さん（県庁生活改善課勤務）の県外組をはじめとして地元から、及川（雨宮）徳江さん、野内（吉田）甲子さん、野口（斉藤）美千代さん、（いずれも生活改善普及員のベテラン）が勢揃い。

午後・時三十分定刻通り開会、学生時代と殆んど変らぬ人、すっかり社会人の落着きと貫録が備わった人と様々、三十一名の盛大なクラス会が始まった。

特に先生方を代表して鞍田先生を始め近先生・新井先生が非常にお忙しい時間をさいて出席して下さり、ひときわ華を咲かせて下さった。

クラス会は、学生時代に帰るために近先生から出席を取って戴いた。

出席の確認が始まった。十五年前の学生時代が想い出される。鞍田先生から励ましの御言葉を戴いて乾杯である。学生時代の想い出や、近況報告、出席出来なかった朋友の紹介など時間がたつのを忘れて話しに花が咲く。飲み物がいっこうに減らない。十五年の歳月は語れば長いものである。

五時近くなって、先生と肩を組んで寮歌の合唱となった。会場が割れんばかりである。十五年ぶりにスクラムを組んで歌った寮歌は感無量であった。

五時三十分会場を後に、宿泊地鯉渕学園に向う。宿泊場所でも夕食会で長い話し合いが続いた。各部屋が静かになったのは夜中の二時頃であったろう。

参集された皆さんが想い出多いクラス会になったと喜んで下さった。今回は都合があって出席出来なかった仲間も次回は全員が顔を揃えられる様、次回の開催を予定しようと、誰れからともなく提案され、協議された結果、次回は、卒業二十年を記念して昭和五十一年秋に開催することに決定しました。五十一年にはクラス全員が出席出来る様、今から計画しようと、申し合わせが行われました。

事情があって出席出来なかった十一期生の皆さんに、今回行われたクラス会の状況を知って戴けたら幸いです。

最後に皆様方の御健斗をお祈りいたします。

十一期生会発起人

代表　倉重・大

十年の〝距離〟一気に短縮

―十六期生旧交暖める―

卒業十周年会は、去る十一月二日―三日、同窓会大会参加を兼ね、友部駅前志美津および学園来賓宿舎で開かれた。

卒業十年の経過報告にはじまり、恩師会を中心に、参加者近況報告、学園状況報告など、話はつきず、学園生活当時を再現したかのように、十年ひと昔の距離が一気に短縮された感況ぶりだった。

夜は広場ストームでの交歓会、恩師訪問や囲碁大会で深夜まで楽しみ、翌日は同窓会大会や交歓会参加、新寮訪問、記念写真会、構内視察など。行ない散会した。

また同期会では、この間不幸にして故人となった藤原（京都）三浦（長野）に心からめい福を祈った。

なお同期会は、次回十六期会を「学園三十周年記念」に伴せて開催することを申し合せ、再会を誓った。

参加者状況つぎのとおり

大谷（福井）、角替（旧姓小田）（静岡）、前原（東京）、藤井（東京）、箱根（茨城）、日生（神奈川）、土方（旧姓日高）（東京）、佐々木（論）同淑子（旧姓飯田）（秋田）、福田（神奈川）南雲（新潟）、村上・同幸子（旧姓小磯）（茨城）、菊地（茨城）、秋田（旧姓川元）（茨城）、青木（東京）与儀（茨城）、須田（茨城）、坪野（事務局）、佐々木、村上の両夫妻はそれぞれお子さんを同伴した。

なお同期生には、参加できなかった方から沢山の近況だよりや挨拶、祝電などを、また同期道人会からはメッセージと金一封を、同窓会本部からは金一封など、それぞれ賜わり、ここに紙面を借り心からお礼を申し上げます。（S記）

写真は、旧交深めた十六期生会（Y写）

同窓生短信

前略―この度、十月一日付で私が九州大竹君が北陸と、それぞれ農政局統計調査部統計調整課長に赴任することになりました。

いろいろ都合があり、二人とも当分の間単身赴任の予定です。一昨夕、麻布グリーン会館で、都内の同窓生有志により盛大な送別会を催して頂きました。

長い間、いろいろお世話になりましたが、二年程、東京を離れておりますのでなにとぞよろしくお願いします。

統計調査部　佐藤三郎（三期）

前略―私も相変らず元気に農協に務めております。

今年は二つの大きなことがありました。第一は、長女が五月に生まれ、第二に、構造改善で一・三ヘクタールも休耕でした。　野崎弘（富山　二十一期）

前略―去る十一月二十三日、結婚いたしました。この喜びと感激をいつまでも忘れずに、人生へのそして酪農への夢をかけて努力前進してまいりたいと思いますので今後とも暖い御指導の程お願い申し上げます。　厚海多美子「旧姓阿部」（北海道　二十五期）

前略―この度大分県農政部農政課勤務を命ぜられ、過日着任致しました。

中略―　何とぞ今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます。　野村和夫（四期）

前略―主人の転勤により高崎に移りました。この五日に徳島を出発、六日に高崎着、八日に荷物が来て、今日十一日、ようやくかたずきました。今度遠くなったので寄こんでおります。

九月十八日、徳島の大歩危で、十九期と二十期の会があり、私も行って来ました。田淵先生が見えられ、谷川、河井、戸田、藤原、服部、井上（奥田）、川崎それに十一期の華岡さんが集まりました。

小出文子「旧姓柴田」（二十一期）

前略―　出発は十二月十三日の羽田発十二時です。―中略―

学園二十一期生の先輩、藤村さんは、ムワンザ市役所で、造園や苗場管理の仕事をしているそうです。隊員生活五年目だそうで、力強い先輩がいるので安心いたしました。

自分にどれだけの事がやれるかわかりませんが、白紙の気持で仲良くやっていきたいと思っています。私はタンザニアの農業省（キリモ）に配属されるのですがどこの地域に派遣されるか、タンザニアに着いてみないとわかりません。今は希望と不安が入り交り、なんとなく気持の落ちつかない毎日です。

久保田誠剛（福島、二十四期）

○○○ 支部だより ○○○

山口・東京

山口県支部長　平佐米光（2期）

前略

本部の皆様、その後御健祥のことと存じます。同窓会について種々の御苦労を頂き感謝して居ります。山口支部同窓一同元気に頑張って居ります。

さて先般同窓会山口支部大会を山口市で開催しました。実は実施の取決めが、急であった故もあり参集人員は十数名であまり多くなかったのは残念でしたが、集った面々は多士才々、鯉渕のなつかしい話……などに花が咲き、鱚の如く飲み且談じ、楽しい一日を過しました。

鯉渕学園の発展、同窓会の発展のためには、我々は如何にあるべきか、建設的な意見も多数でましたが、

①とにかく、山口支部は山口県内の各所各地で、鯉渕の誇りをかかげて頑張らねばならない。

②このため横のつながりを強めるため年一度の同窓会にはなるべく多く参集しよう。

③同窓生相互連絡を旨とした「山口支部だより」を年一回発行しよう。

④来年の同窓会山口支部大会には、鯉渕本部からどなたか、招いてはどうか。などが話し合われました。支部長の尻をたたく勇しき後輩が多数居りますので、少しづつ進めて行きたいと存じます。

ここで我々として最も反省すべき点と申しますと、近年中に卒園して山口県に在住している者および在園生との連絡が、ない事です。今年の大会には私の不手際で連絡不徹底となり、定に申訳ないと思って居ります。

今後はこれを解決して、支部の発展を期したいと存じますので、よろしくお願い申し上げます。

なお当支部としては、県内を、東部、西部、長北、中央のブロックに分け、各々代表世話人を選びました。また各期別にも世話人を選んで、連絡徹底を図ることにいたしました。（後略）

☆☆☆☆

東京支部総会開催

☆☆☆☆

十二月七日六時より、東京大手町、農協ビルにおいて東京支部総会が開催されました。出席者数五十余名、首都の支部だけに集った顔ぶれは、農林省・農業団体・衆参両議員秘書・民間会社員・販売業を営む者まで多士済済。したがって、自己紹介にどっと涌くことしばしでした。

気分が高揚するにつれて、音楽パーティー。白土忠男（九期）の発声で次から次へと十八番が披露されました。

最後に役員改選に移り、支部長に福丸博房氏（林野庁　九期）以下新役員を選出し、来賓として出席された秋浜学園長の発声で万才を参唱して幕を閉じました。

本部から事務局長が出席し、会費納入と名簿、鯉渕学報の購入をお願いしましたところ心よく協力して下さいました。厚く御礼を申し上げます。

（事務局長　高橋記）

著書紹介

早川孝太郎全集　全一〇巻別巻一冊

編集　宮本常一・宮田登

A五判、月報八頁　頁数平均五〇〇頁、定価、各巻平均予価二八〇〇円

昭和四六年九月より刊行、未来社

私達の師、故早川孝太郎先生の業績が全集として発刊されます。くわしくはお近かくの書店か直接未来社（東京都文京区小石川三―七、TEL〇三（八一四）五五二一）にお問合せ下さい。

ヨーロッパの新婚旅行

二四期　千葉　加藤成一

去る九月三十日より十月十四日までの二週間、農業改良普及協会主催のヨーロッパ（イタリア・スイス・ドイツ・オランダ・フランス・イギリス）農業視察の旅行に参加しました。十四名のグループでしたが、農改・生改の普及員や県の関係者の他に若い農業自営者の参加もあり多彩なメンバーで楽しい旅でした。

気候も風土も違うヨーロッパ農業をそのまま日本には導入できないにしても、一番うれしかった発見は農業者がみんな農業に誇りとよろこびをもってやっていることです。「あととりだから」という宿命的なものはついぞ耳にしませんでした。日本農業にも早くそうした明かるい時代が来てほしいですね。

私自身が得できた最大の収穫はやはり自分の世界が広くなったことでしょう。日本を見る時、世界の中で見るし、今まで当り前と思われていた事が日本的だという発見でした。日本農業、日本人の良いところは伸ばし、遅れているところは改良しなくては……。そんな自分自身のスケールの成長がうれしいです。島国に閉じこもらないで若いうちに借金をしてでも外国に行きたいですね。

ところでその費用六十万円は結婚資金を使ったし、十四日間は新婚旅行用の年休でした。私の花嫁はヨーロッパという時間と空間の姿のない人でしたけれどとても有意義な新婚旅行でした。

日本農業経営者連盟結成さる

わが国経済のいちじるしい成長によって、国際的な自由化圧力の高まりは日ましに強まり、農業といえども孤立主義は許されなくなってきているので、国際的競争力を持つ日本農業を確立することは、われわれ農業者に課せられた今後の課題である。またこれからは情報化社会と云われる如く各種の情報が流通するので、必要な情報を正しくとらえ、技術革新による、より高度な経営を行う必要がある。

そこで他産業と同様な経営理念に裏打ちされた革新的技術の導入、流通の合理化、及び資本を装備した農業を樹立し、他産業に伍する所得をあげ、併せて農業の国際的交流を図るため、ここに日本農業経営者連盟を結成したので紹介する。

本連盟の目的（第三条）

日本農業が国の発展の基礎産業として、また国民の食糧需要に応えるため、国際競争力のある農業として確立される必要があるので、その先駆的農業経営の新分野を開こうと志を同じくするものがここに協力して共通の課題を究明し、その実績を広く国民各層に提供すると共に、日本農政に対する大きな方向付けを切なうと共に国際農業に資するを目的とする。

本連盟の事業（第四条）

一、国際協争力のある農企業に必要な情報や技術の交流、提供に必要な調査研究を行う。

二、日本農業のビジョンを確立するため、共通課題について、各界有力者と定期懇談会を行う。

三、会員の実績、調査研究内容、資料等を印刷物の刊行その他の方法によって広く国民各層に提供すること。

四、農業の国際的役割について、とくにアジア諸国における農業開発、農民福祉について、農業の国際的分業、国際協調の観点から積極的な協力を行う。

五、本会の日本農業に関するビジョンは、その都度提言として公表し、国民的論議を通じて、農政の新しい方向づけに寄与するための推進をはかる。

本連盟の会員（第五条）

本会の会員は正会員、会友の二種類とする、正会員は農企業を志す、代表権を有する農業経営者とし、入会規程は別に定める。会友は本会の趣旨・目的に賛同する学識経験者とする。

本連盟の財政（第六条）

本会の財政は会員の会費によってまかない、正会員は年間二万円、会友は一万円の会費を納入する。その他の規約は省略。

事務所は東京都千代田区霞ケ関三―六―五三和ビル内。（日本農業経営者連盟）にある。

現在の正会員は全国から参集し、水稲・酪農・果樹・施設園芸・養豚・養鶏・請負耕作等、わが国の代表的農業経営者が入っており、会友には川延謹造・神谷克巳・坂本二郎・末次一郎・吉田六順・並木正吉・伊藤善市・中村広次・松浦竜雄・山地進・武田邦太郎・鳥山忠一・秋沢潤一・加藤寛その他多数の諸先生が参画している。　文責　本連盟理事　渡辺正信（七期）

事務局だより

西村典夫前事務局長に謝意を表す

昭和四十四年十一月から二カ年にわたって、いや、同窓会発足当時から今日まで同窓会の業務を陰に陽に担当されてきました。前年度はとくに、会報、同窓会名簿・鯉渕学報の発刊、および鯉渕学園の将来計画の立案にあたって、関係者との懇談の推進など精一ぱいの尽力をされました。この労苦にたいし心から感謝の意を表します。

同窓会名簿・鯉渕学報購入のお願い

同窓会名簿・鯉渕学報は、学報編集委員、前事務局長および関係者各位の努力によって、前年度末に発刊されました。

これら配布については、既に購入予約者・各支部長・同窓会役員・および一部会員に発送いたしました。また、鯉渕学報については学園関係諸機関に発送しております。

しかしながら、全部数を処理出来ず残部がありますので是非購入をお願いいたします。（名簿一部〒共五〇〇円、学報一部〒共二〇〇円）

会員にお詫び

一部会員の皆様、名簿・学報の配布にあたって、誠に失礼な方法でお願い申し申しわけありません。平身低頭してお詫びいたします。

会費納入のお願い

会費の納入状況は好転してまいりました。とくに福井支部については、昭和四十三年度より去る九月三十三名分というように一括して送金いただいております。また、山口支部では卒業時納入された新入会員を除いて六十名中、納入者二十八名と半数に近い会員が納入されております。

しかし、全体としてみると納入率は低く、四分の一の会員によって事務局の台所は動いております。

会員の皆様、会費を納入して下さい。同封の振替用紙には四十五・四十六年度会費とありますが原簿と照合のうえ処理致しますのでよろしくお願いいたします。

事務局長新任の挨拶

大会後の常任委員会において、再二の辞退もむなしく引受けてしまいました。

全く予期しない突然のことでした。

いま考えると引受けたことが同窓会活動を停滞させ、皆様に迷惑をおかけするのではないかと不安でなりません。私の職場は酪農場、昭和四十五年度からは三年制への移行が完了して農場職員に課せられる仕事も増加するでしょう。また、学園でも僻地にあります農場、同窓会事務所もなく、会議室が書類の置場、連絡も不充分、事務処理もあっちへ行ったり、こっちへ行ったり、ふなれもあって思うにまかせません。しかしながら、できる限りと心に決めております。いたらぬ未熟者ですがよろしくお願い致します。